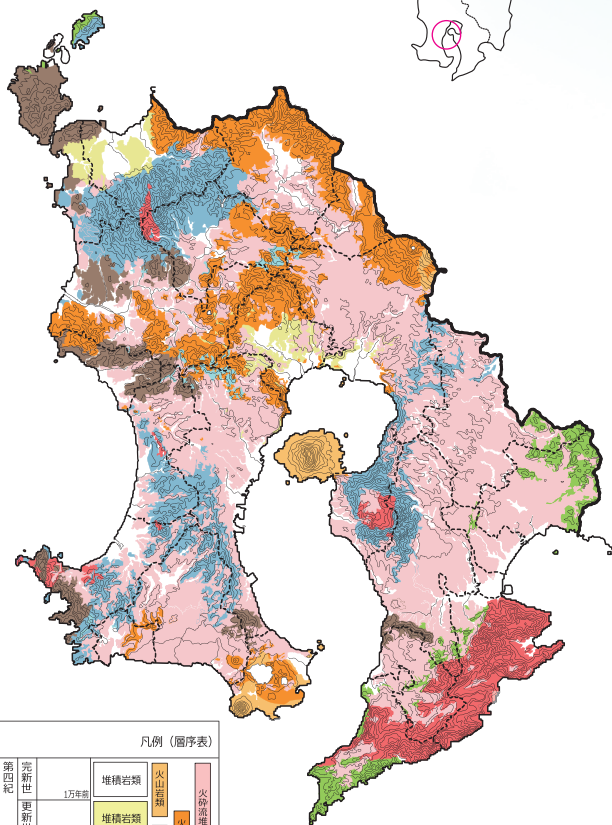




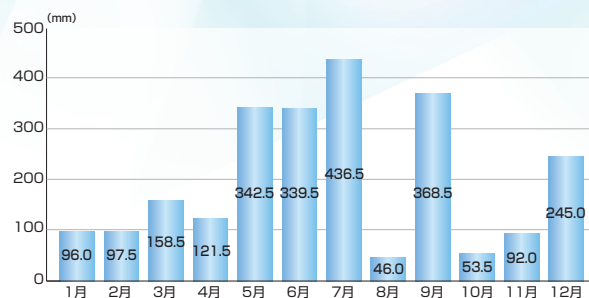
鹿児島市の概要

鹿児島市は、九州の南端鹿児島県本土のほぼ中央にあって、東経130度23分から130度43分、北緯31度17分から31度45分に位置する。



鹿児島大学総合研究博物館ニュースレター
No.30の地質図に加筆

平成30年の年間降水量は、2,397mmに達し、例年6月から7月にかけての降水量が多く、平成30年は、年間降水量の約3分の1がこの時期に降った。ちなみに、気温は、過去5年間の平均によると夏季最高気温36.3℃、冬季最低気温-1.1℃で、年間平均気温18.9度という温暖な気候に恵まれている。



市街地は、鹿児島湾に流入している甲突川など7つの中小河川により形成された小平野部にあり、その周辺は、海拔60mから250mの丘陵地帯（シラス台地）となっている。鹿児島市のシンボルとして知られている桜島（標高1,117m）は、市街地から約4kmの対岸にあり、現在も活動を続けており、風向きによって、火山灰が市街地に降ることがある。（平成30年の桜島爆発回数479回、年間降灰量1,218g/m²）

鹿児島市は大地の隆起や沈降を記録する、複雑な地質を持っている。北東部の吉野台地、牟礼ヶ岡、赤崩は隆起した地域で、高度200m付近には貝化石を含む、60万年前より古い海の地層が分布する。さらに西佐多町西中の高度50m付近では約40万年前の海の地層、吉田貝層が分布している。北西部の三重嶽、八重山も隆起した地域で、さらに古い100万年前より古い湖の地層や火山岩が分布している。一方、鹿児島市の中央部は沈降し、60～40万年前の海の地層や火砕堆積物は温泉ボーリングの際に採取されたコア（地質サンプル）で地下に厚く堆積していることがわかっている。鹿児島市の地層は、南部の山地を形成する中生代白亜紀の堆積層と、新生代第四紀の3枚の海の地層、10枚以上の火砕堆積物から構成されている。火砕堆積物が溶結した凝灰岩は磯の仙巖園、谷山の慈眼寺などの美しい景観を作り出し、石材にも使われている。活火山桜島がそびえ、県庁所在地では日本一の温泉の源泉数を誇っている。